

室蘭港の活性化に関する雑感

— 軍港化とは異なる方向をめざして

清 末 愛 砂

今年の八月一九日、室蘭港にピースボートのオーシャン・ドリーム号が寄港した。ピースボートといえば、「地球一周」「世界一周」をキャッチフレーズに客船で各国をまわる企画を思い浮かべる人もいるだろう。また、平和運動関係者であれば、洋上で平和や人権について学びながら旅するイメージを持っている人も多いだろう。

そのピースボートが二〇日間の「日本一周クルーズ(夏の北海道周遊)」を企画し、その寄港先のひとつとして室蘭が選ばれた。日本一周とはいうものの、実際には釜山やウラジオストクにも寄港するプチ海外旅行付きのものである。八月四日に大阪を出発し、広島、鹿児島、長崎、釜山などへの寄港を経て室蘭港に入港した。

わたしは、事前にピースボートから依頼を受け、室蘭でのスタディツアーのうち日本を含むアジア諸国の大学生を対象とする地球大学参加者用のツアーでミニ講演と案内を担当することになった。ミニ講演では、中国、台湾、タイ、日本等から参加した大学生に先住民アイヌから土地や生活手段を収奪しながら成立した北海道の歴史や、「鉄の町」として知られる室蘭と戦争とのかわり(加害と被害の

両側面とその相互関係)などを概説した。工業化の観点だけでなく、それゆえにおつた負の歴史を含めて室蘭という町を語らなければ、学生は港周辺に工業地帯が広がる街という表面上の印象を持つだけで終わる。

スタディツアーを終え、学生とともに中央ふ頭に戻るバスに乗っているときに、オーシャン・ドリーム号が目の中に入ってきた。その巨大な姿にわたしは思わず歓声をあげた。ふ頭に到着すると、船の前で地元の中学校の吹奏楽部の学生が歓迎演奏をしていた。また、多数の出店が並び、市長をはじめとする市の関係者も集まっていた。船の中で行われたコンサートでは地元の少年少女合唱団がかわい

い歌声を披露し、大きな拍手をあげた。乗客者数は乗客と乗組員を合わせて約一五〇〇人であった。オーシャン・ドリーム号は客船としては比較的小型のものである。それでも半日の寄港とはいえ、人口減少が進む室蘭市(人口はすでに九万を割り、一九六〇年代末のピーク時の半数以下である)にこの数の訪問者が訪れたということは、経済面から考えてもそれなりに大きな収益があったと推測される。そうであるからこそ、室蘭市はピースボートの受

け入れを大歓迎したのだろう。

オーシャン・ドリーム号の寄港は、残念ながら今年最後の室蘭港への客船の入港であった。かつての室蘭港は多数の輸送船等が港に入りきれず、沖合で順番を待たなければならぬ状況にあったという。いま多くの船会社がより利便性が高い苫小牧港を利用するようになったため、深い天然の良港であるにもかかわらず室蘭港は閑散としている。船が入ってこなければ、室蘭市に入港料などが入ってこない。民間船の寄港が望めないとなれば、市が頼るのは自衛艦の入港だ。

二〇一四年五月、室蘭市議会は「室蘭港の防災拠点港の拡充を図る自衛隊の輸送関連施設の誘致を求める決議」を採択した。定期的に噴火する有珠山が近くにあることから、自衛隊と連携した形での防災拠点港の拡充が打ち出されたのである。同時にそこには関連施設をつくり自衛艦の入港を促すことで室蘭港の利用率を上昇させたい、というもう一つの思惑があったはずだ。防災名目であっても自衛隊の関連施設がつけられ、実際に自衛艦の入港が増えると(現在でもときおり入港している)、港は徐々に軍港の側面を帯びてくるだろう。そうなると、客船の寄港にも影響がおよびかねない。室蘭を含む胆振西部には地球岬や登別温泉などの名高い観光名所がある。これらをアピールしながら、客船にとつて魅力ある受入れ策を考える方が、コミュニティの活性化と住民の平穏な生活につながるのではないだろうか。

へきやすえ あいさ・室蘭工業大学大学院工学研究科准教授